

# 正保国絵図の調査と「村差出帳」

——山城国・相模国を中心に——

礧 永 和 貴

## はじめに

正保国絵図は、川村博忠が指摘する<sup>(1)</sup>ように江戸幕府がはじめて国土の基本図として本格的な作成基準を示し、縮尺（六寸一里＝約二二、六〇〇分の一）と絵図様式の統一をはかり、その後における国絵図の基準となった日本地図史上画期的な意義をもつ絵図である。

ところが、正保国絵図の編纂事業に関する記録類が少なく、一部の大名領国における断片的な状況が知られるだけである。特に、近畿から関東にかけての幕府領や相給が多い非領国における正保国絵図の研究は決して多くはない。そこで筆者は、正保山城国絵図の記載内容を翻刻して特徴を検討を加え、いくつかの問題点を指摘した<sup>(2)</sup>。その課題の一つに、正保山城国絵図の作成に関する調査の実態を解明する必要性を述べた。それは、正保山城国絵図と郷帳に関する「村差出帳」とそれに付属した「絵図」が現存し、さらには記録類がみられたからである。また、その後相模国をはじめ丹波国や陸奥国においても村差出帳が存在していることがわかった。

相模国では、正保二（一六四五）年の村柄を記した村差出帳が知られ、木村礎はその村差出帳をもって「村明細

帳」の原型とし、『平塚市史』と丸島隆雄は同帳が正保国絵図に関連して作成されたとしている。

山城国では、田中敏雄が正保山城国絵図に際して当時の画壇で活躍した伊藤長兵衛が鹿苑寺領の絵図を作成したことを『隔賞記』によって明らかにした。ただし、田中は長兵衛の画業が検討課題であり、「村差出帳」に関しては触れられなかった。

このように、正保国絵図の編纂に関して「村差出帳」とその付属絵図が作成されたことは明らかである。

しかし、一、村差出帳の調査がいかなる地域でおこなわれ、それが正保国絵図の編纂事業においてどのような位置にあるのか、二、村差出帳による調査は具体的にどのようなものであったのか、三、村差出帳の種類や調査項目の特徴とその成立過程はどのようなものなのかについて、十分な検討がなされたとはいいたい。

以下小論では、右の三点について山城国と相模国を中心に検討するものである。

## 一、編纂方法の分類と村差出帳の調査対象地

幕府は、正保元（一六四四）年一二月に正保国絵図の編纂事業を大名をはじめとする各領主に伝達し、絵図元と呼ばれる編集担当の大名や幕府官僚の郡代、代官などを任命した。こうした絵図元の性格によって、国絵図の作成は異なった方法がとられたようである。

川村によると幕府の作成基準には、二種類のものがあったと考えられている。大名の絵図元に出された幕府の作成基準である「国絵図可仕立覚（二三カ条）」と「絵図書付候海辺之覚（一七カ条）」には全項目があるが、幕府の郡代や代官に宛てられた『御当家令条』には、城絵図と一国全体にかかわる条目がみられない。大名と幕府官僚に出した作成基準は異なり、それぞれに補足的な説明が加えられたと考えられている。

また、幕府領では延宝検地のように大名領と異なった様々な統一の調査が行なわれている。従って、正保国絵図の

編纂においても幕府領では違った調査方法がとられたと可能性が考えられなくもない。

まずは、村差出帳のそのものの問題に入る前にこうした絵図元の性格や領主による国絵図編纂の方法の違いについて検討する必要があるように思われる（第1表参照）。

絵図元の選択は、第一に各国で最も石高の多い大名が選ばれている。その場合、藩庁の位置とは関係はない。例えば、伊勢国では津藩をはじめ七大名の領地があったが、最も石高が高いのは紀伊国和歌山藩であったので同藩が絵図元選ばれた。また、伊勢国の津藩は伊賀一国を領していたので同国の絵図元となった。

第二に、近世における領主配置や領地支配の関係によって絵図元が選ばれた。それは、大名のみが絵図元だった場合（四七カ国）と幕府の官僚である郡代や代官が絵図元選ばれた国（二一カ国）とにわけられる。大名のみが絵図元となった地域は遠国が多く、幕府官僚が絵図元に含まれた国は関八州から東海、畿内に集中している。この範囲で大名のみが絵図元となったのは、紀伊をはじめ伊勢、尾張、常陸国の所謂徳川御三家が領する国だけである。本地域は、多くの領主が錯綜する所謂「非領国地帯」で、幕府領や旗本領が多かったので幕府官僚が絵図元となったのである。この他に、佐渡や石見・但馬などの幕府直轄領がある国も幕府官僚が絵図元となった。

このように、大名の拝領高に応じた身分的秩序や複雑な所領支配の実態から絵図元が選択され、これに対応した調査方法がとられた。

第1表は、以上の問題を勘案し、正保国絵図編纂における各国大名と絵図元の関係を分類したものである。

「A」は、一国が一大名で必然的に絵図元となった場合である。これは、自分の領地を調査するのだから問題はない。一般には、伊賀、志摩、尾張、飛騨、若狭、能登、伯耆、出雲、隠岐、美作、備前、安芸、紀伊、淡路、阿波、薩摩、大隅、壹岐、対馬が該当するように思われる。しかし、厳密にみると尾張、若狭（B1の例で後述）、伯耆には寺社領（御朱印地）などがあって一国一領主とはいえない。一国一大名領は、一七カ国が該当する。また、一国が幕

第1表 大名の石高と絵図元の選択

	旧国	絵図元/絵図元以外の藩名 ※()内の数字は領石高で、単位は万石以下省略	絵図元の類型
畿内	山城	京都所司代・長岡(2)・郡代/淀(10)→河内国の絵図元	B 2
	大和	郡山(15)・高取(2)・奈良奉行/松山(3)・小泉(1)・新庄(1)・戒重(1)・竜田(1)・柳生(1)・柳本(1)	B 2
	河内	淀(10)・代官・代官/狭山(1)・丹南(1)	B 2
	和泉	岸和田(6)・堺政所職 /陶器(1)	B 2
	摂津	尼崎(4)・高槻(3)・多田銀山代官・天草代官/三田(3)・麻田(1)	B 2
東海・道	伊賀	津(32)/—————	A
	伊勢	和歌山(55)/津(32)→伊賀国の絵図元・桑名(11)・神戸(2)・菰野(1)・長島(1)・亀山(1)	B 1
	志摩	鳥羽(3) /—————	A
	尾張	名古屋(61)/—————	B 1
	三河	尾崎(5)・吉田(4)・刈谷(3)・代官・代官/西尾(3) 田原(1)・中島(1)・拳募(1)・深溝(1)	B 2
	遠江	横須賀(5)・浜松(3)・掛川(3)・代官/横須賀(5)・浜松(3)・掛川(3)	B 2
	駿河	田中(2)・駿府町奉行・駿府町奉行・代官/田中(2)	B 2
	甲斐	谷村(1)・代官・代官/徳美(1)	B 2
	伊豆	代官/幕府領	B 2
	相模	小田原(11)・代官・代官/玉縄(2)	B 2
	武蔵	忍(8)・岩槻(5)→上総国の絵図元兼任・川越(3)・関東郡代/忍(8)・岩槻(5)・川越(3)	B 2
	安房	東条・(1)北条(1)・佐貫(1)・大番頭・書院番頭/東条(1)・北条(1)	B 2
	上総	岩槻・久留里(2)・代官/佐貫(1)・刈谷(1)	B 2
	下総	岩槻(11)・関宿(1)・代官/古河(13)・佐倉(11)・関宿(1)・高岡(1)生実(1)	B 2
	常陸	水戸(25)/笠間(5)・麻生(2)・土浦(2)・玉取(1)・谷田部(1)・牛久(1)・宍戸(1)・府中(1)	B 3
	近江	彦根(18)・膳所(7)・水口(2)/仁正寺(2)・大溝(2)・小室(1)・大森(1)	B 3

東 山 道	美濃	加納(7)・大垣(5)・郡代／岩村(2)・郡上(2)・高須(2)・苗木(1)	B 2
	飛騨	高山(3)／—————	A
	信濃	松代(10)・小諸(5)・飯田(5)・松本・上田(6)・飯山(4)・高遠(3)・高嶋(3)・代官・代官／須坂(1)	B 2
	上野	前橋(10)・高崎(6)・館林(6)・代官／沼田(3)・安中(2)・小幡(2)・伊勢崎(1)・七日市(1)・吉井(1)	B 2
	下野	古河(13)・宇都宮(10)・代官／烏山(2)・黒羽(2)・壬生(2)・大田原(1)・鹿沼(1)・皆川(1)	B 2
	陸奥	5 分割	B 3
	出羽	3 分割	B 1
北 陸 道	若狭	小浜(12)／—————	B 1
	越前	福井(62)／大野(5)／松岡(5)・丸岡(4)	B 1
	加賀	金沢(103)／大聖寺藩(7)	B 1
	能登	金沢(103)／—————	A
	越中	金沢(103)／富山(10)	B 1
	越後	高田(25)／村上(10)・長崎(7)・新発田(5)・安田(3)・藤井(2)・椎谷(1)・与板(1)・沢海(1)	B 1
	佐渡	勘定頭兼佐渡奉行／幕府領	A'
山 陰 道	丹波	篠山(5)・福知山(4)・亀山(3)／柏原(3)・園部(3)・綾部(2)・山家(1)	B 3
	丹後	宮津(7)・田辺(3)／峰山(1)	B 1
	但馬	出石(5)・代官 (但馬銀山奉行)／豊岡(1)	B 2
	因幡	鳥取(32)／鹿野(1)	B 1
	伯耆	鳥取(32)／—————	B 1
	出雲	松江(18)／—————	A
	隠岐	松江(18)／—————	A
	石見	浜田(5)・津和野(4)・勘定頭／吉永(1)	B 2
三 陽 道	播磨	姫路(15)・明石(7)・竜野(6)・山崎(5)／赤穂(5)・小野(1)・新宮(1)・林田(1)	B 1
	美作	津山(18)／—————	A
	備前	岡山(32)／————— →備中国の絵図元兼任	A

三陽道	備中	岡山(32)／松山(5)・足守(2)・庭瀬(2)・岡田(1)	B 1
	備後	広島(42)／福山(10)・三次(5)	B 1
	安芸	広島(42)／————— →備後国の絵図元兼任	A
	周防	萩(36)／下松(4)	B 1
	長門	萩(36)／萩(36)→長門国の絵図元兼任・長府(3)	B 1
南海道	紀伊	和歌山(55)／————— →伊勢国の絵図元兼任	A
	淡路	徳島(25)／————— →阿波国の絵図元兼任	A
	阿波	徳島(25)／—————	B 1
	讃岐	高松(12)／丸亀(5)	B 1
	伊予	松山(15)・宇和島(10)・大洲(6)・今治(4)／西条(2)・小松(1)	B 1
西海道	土佐	高知(24)／中村(3)	B 1
	筑前	福岡(43)／秋月(5)・東蓮寺(4)	B 1
	筑後	久留米(21)・柳川(19)／三池(1)	B 1
	豊前	小倉(15)・中津(8)／—————	B 1
	豊後	臼杵(5)・岡(7)・杵築(3)・佐伯(2)・高松(2)・府内(2)・日出(2)／森(1)・幕府領	B 3
	肥前	佐賀(35)／唐津(8)・小城(7)・平戸(6)・蓮池(5)・島原(3)・鹿島(2)・大村(2)・五島福江(1)	B 1
	肥後	熊本(54)／宇土(3)・人吉(2)・富岡(2)	B 1
	日向	鹿児島(77)／・飫肥(5)・延岡(5)・佐土原(3)・高鍋(3)・幕府領	B 3
	薩摩	鹿児島(77)／————— →大隅国・日向国・琉球の絵図元兼任	A
	大隅	鹿児島(77)／—————	A
	杵岐	平戸(6)／—————	A
	対馬	対馬府中／—————	A
	琉球	鹿児島(77)／—————	A
	松前	松前／—————	A

注) 絵図元は、川村博忠(1984)『江戸幕府撰国絵図の研究』古今書院116～118頁を参照した。また、絵図元の藩名及び絵図元以外の藩名と石高は、藩主人名辞典編纂委員会編(1986)『三百藩主人名辞典第1～4巻』新人物往来社に依拠しつつ、(1967)『新訂寛政重修諸家譜』続郡書類従完成会によって確認を行った。

府領で幕府官僚のみが絵図元となった国に佐渡があるが、これは特殊な例であろう「A」。

「B」は、一国に複数の領主の中から絵図元が選ばれた場合（四七カ国）で、絵図元の選択方法で最も多い。さらに、絵図元の身分や領地からして、「B1」一国に複数の領主がいてその中から選ばれた「大名」が絵図元となった場合（二五カ国）、「B2」一国に複数の領主がいて「幕府官僚」が絵図元に含まれた国（二カ国）、「B3」幕府領があるが大名が絵図元になった国（六カ国）に分類できよう。この場合、絵図元は自分の領地以外の絵図をどのように作成したのだろうか。結論からいえば、絵図元になったからといって他の領地を詳細に調査するのは不可能であった。絵図元は、各領主の提出した領分絵図や村差出帳を接合したり利用して一国絵図を編集したにすぎない。「B1」では、すでに川村が肥前国の各大名が領分絵図を作成し、それを絵図元が一国絵図に合成したことを明らかにしている。ここでは、この他に知り得た二、三の例を付け加えたい。

肥後国における正保国絵図の絵図元は、細川藩が担当した。同国内には、球磨郡の人吉藩領と天草郡の島原藩領があった。また、豊後国にも細川藩の飛地領が点在していた。そこで細川藩は、正保元年一二月の正保国絵図編纂の伝達と同時に、大目付井上政重と宮城和甫に対し「当国之儀如存求摩・天草ハ一国之儀ニ候ヘ共、他領ニ而候間、免帳旁不成儀ニ候、豊後之内我等領内之分ハ明細ニ別紙ニ可仕上と存候」と、他領の調査が容易でないことと、他国の豊後であっても細川領については調査する旨を申し入れている。こうした申し出は、恐らく編纂事業の当初から各絵図元から出されたとみてよい。その結果、各領主が領分絵図を絵図元に提出し、それらを絵図元が合成して一国絵図に仕立てる編纂方法が採用されたのであろう。

若狭国小浜藩の領地は、若狭一円の領地とともに近江国高島郡や越前国敦賀郡にもあった。そのため他国であるが、小浜藩はこれらの郡の絵図と郷帳も作成した。現存する正保若狭国絵図には、敦賀も描かれている。また、若狭国内であっても朱印地である遠敷郡の常高寺領と諸鶴太夫領は同国絵図には描かれていない。これらの領地については、

別の絵図と郷帳が作成されたものと思われる。<sup>(10)</sup>

大和国では、郡山藩の本多政勝、高取藩の植村家政、奈良奉行の中坊時祐が絵図元に任命された。次の史料は、絵図元の本多と植村が東大寺に出したものだが、中坊の名はない。

「本多内記政勝・植村出羽守家政連署書状」

以上

一筆令啓達候、然者大和一国之絵図被仰付候間、御領分之絵図並村々之高帳御書付御差上ケ可在之候、絵図帳共ニ相違無之様ニ被入御念、可被仰付候、次従公儀出申候覚書之内、郡切ニ入申候所書出シ別紙ニ進之候、為其如此候、恐惶謹言、

壬（正保二年）五月十三日

植村出羽守家政（花押）

在江戸ニ付加判無之候、

本多内記（政勝）

### 東大寺

東大寺の領地は、添上郡市本村内の二、〇〇〇石であった。市本村は、東大寺領の他に一乗院領九七石余、興福寺領四〇石余の相給地である。山城国の場合は、こうした相給の村であれば、村差出帳が作成されている。しかし、東大寺領では「御領分之絵図」と「村々之高帳」を差し出すことと、それを幕府からの作成基準によって念を入れて作製することが求められている。前述のように、幕府の国絵図基準に二種類のものがあり、東大寺領を調査した絵図元が大名であったことから、一村内の二、〇〇〇石の領地でも大名絵図元に出された基準に従って領分絵図とそれに対応する郷帳の提出が要求されたのであろう。



この他、正保伊勢国絵図は、領地毎に歪みがみられ、それは領分絵図を合成したことに起因すると考えられている。<sup>(13)</sup> また、正保出羽国絵図は、当時同国を領していた八藩が領分絵図を作成し、最終的に絵図元の秋田藩が接合して一国絵図となされた。

このように、「B1」の国においては正保国絵図は、まず各領主が自分の領地を国を問わず作成し、それを絵図元へ集めて一国絵図が合成された。このような作成段階をとったので、各領主毎の領分絵図や郷帳が各地に伝存することとなったのであろう。

さて、「B2」と「B3」は、村差出帳による調査と考えられる。

現在のところ管見できた正保国絵図事業に關係して作成された村差出帳は、山城国（九点）をはじめ相模国（九点）と陸奥国・丹波国（各一点）である（第2表参照）。

「B2」は、複雑な所領構成から幕府官僚が国絵図編纂に關与し、大名領以外の地域で村差出帳が作成された相模と山城の場合である。

相模国には、小田藩領の他に玉縄藩があったが、他は幕府直轄領が国全体の三分の一から半分を占め、残りが旗本・御家人領であった。相模国における村差出帳の調査は、その宛名によると幕府直轄領は代官、旗本領は小田原藩稲葉氏と代官の共同で行なわれたことが知られる。

山城国は、周知の通り様々な領主の領地が錯綜し、相給地が多い。村差出帳は、大名領以外を対象にしており、その宛先はすべて京都所司代の板倉重宗であった。

「B3」は、幕府領を対象とした村差出帳による調査である。陸奥国と丹波国の差出帳は各一点だけであるが、前者は南山御蔵入領と呼ばれる幕府直轄領で、後者は旗本津田家領と幕府直轄領の相給地である。両国の絵図元は大名が任命され、その大名に村差出帳を提出している。幕府直轄領では村差出帳によって調査がなされたことが知られる。

差 出 帳 の 一 覧

出 典	
藤沢市史編さん委員会編『藤沢市史第1巻資料編』藤沢市、1970 768～769頁。	
同上	769頁。
神奈川県史編集室編『神奈川県史資料編六近世三』神奈川県、1973 689頁。	
同上	689～690頁。
同上	690頁。
同上	『神奈川県史編料編八近世五上』神奈川県、1976 865～866頁。
平塚市編『平塚市史三資料編近世(2)』平塚市、1983 705～706頁。	
同上	470～471頁。
同上	471～472頁。
東京大学史料編纂所編『大日本古文書家わけ第17大徳寺文書9』東京大学、1971 2600号文書。	
同上	2599号文書。
京都市編『史料京都の歴史第6巻北区』平凡社、1993 323～324頁と371～372頁。	
同上『史料京都の歴史第14巻右京区』同上、1994 349～350頁。	
同上	564～565頁。
同上	91～93頁。
長岡京市史編さん委員会編『長岡京市史資料編三』長岡京市、1993 232～234頁。	
宇治市史編さん委員会編『宇治市史第6巻』宇治市、1980 145～147頁。	
山城町編『山城町史史料編』山城町、1991 410～413頁。	
亀岡市史編纂室収集文書（広瀬年世氏所蔵）	
福島県編『福島県史第10巻下、資料編五下、近世資料四』福島県 946～949頁。	

第2表 現存村

国名	史料番号	史料名	作成年
相模国	①	(村差出明細書)※雛型	正保2年5月
	②	(村差出明細書)※羽島村	正保2年5月
	③	(与瀬村明細差出)	正保2年5月
	④	(与瀬村明細差出)	正保2年10月
	⑤	(下川尻村明細差出)	正保2年9月28日
	⑥	(手広村田畑差出)	正保2年10月
	⑦	(入山瀬村村柄書上)	正保2年11月
	⑧	(土屋惣領分村柄書上)	正保2年6月
	⑨	(中郡内窪田領書上)	正保3年6月
山城国	ア	(大宮郷家数并人数差出帳)	正保2年8月28日
	イ	(大宮郷高指出帳)	正保2年9月9日
	ウ	(山城国葛野郡北山郷四方境覚)	正保2年10月1日
	エ	(竜安寺領差出帳)	正保2年10月2日
	オ	(原村差出帳)	正保2年11月3日
	カ	(郡村差出帳)	正保2年12月
	キ	(長法寺村明細書上)	正保3年3月15日
	ク	(炭山村明細書写))	正保3年5月
	ケ	(神童寺村差出帳)	正保3年7月11日
丹波国	A	丹波桑园郡江嶋里村高家数覚	正保3年7月21日
陸奥国	a	田島町差出帳	正保2年3月

※本表の史料番号は、第3表、第1図及び本文中の村差出帳の史料番号と一致する。

正保期における丹波国における直轄領は、七・六パーセントに過ぎなかったので、幕府官僚を絵図元に任命しなかったと考えられる。陸奥も同じ理由によるものであろう。

以上のように、正保国絵図の編纂事業は、近世封建制における領地の封鎖的な性格を基本原則として領分を単位にして行なわれている。村差出帳による調査は、複雑な所領でかつ幕府官僚が絵図元となった国と幕府直轄領で行なわれたものと考えられる。

正保国絵図と郷帳にみられる特徴の一つに領主名が記載されることが掲げられる。杉本史子は、元禄国絵図にいたって領分記載が払拭されたことを寛文印知によって「統一的な知行体系の体制的把握」<sup>14</sup>がなされたとしている。印知以前の正保国絵図においては、領分記載が幕府と領主にとっても重要な意味をもっていたのである。このことは、正保国絵図において領分絵図や村差出帳などが領主毎に作成され、それを接合して一国絵図に仕立てる方法が採用される理由の一つであると考えられる。

## 一一、編纂事業の経過と村差出帳による調査

### (一) 山城国における調査の進行過程

それでは、具体的にどのように正保国絵図の編纂事業と村差出帳による調査が進められたのであろうか。相模、丹波、陸奥については詳細なことは不明である。従って、史料が多く残存する山城国について検討する。

山城国における正保国絵図の絵図元は、京都所司代の板倉重宗、代官奉行の五味豊直、乙訓郡長岡の大名永井直清の三名である。<sup>15</sup>ほかに同国に城を持つ淀藩があったが、同藩主の永井尚政は藩領の多い河内国の絵図元を担当した。

まず五味は、江戸において正保二（一六四五）年三月頃に山城国の絵図元と編纂方法を井上政重から伝達されたよ

うである。その後、四月七日永井へ次の書状<sup>(16)</sup>を出した。

(前略) 山城国絵図之儀、貴様・周防殿被仰付、拙者共も加井上筑州より被申入旨被仰越候、罷上候節絵図之仕立様委り申し候由、承可参候、爰許之様子兩人之御使可被申達候間不能詳候恐惶謹言、

卯月七日

五味金右衛門尉

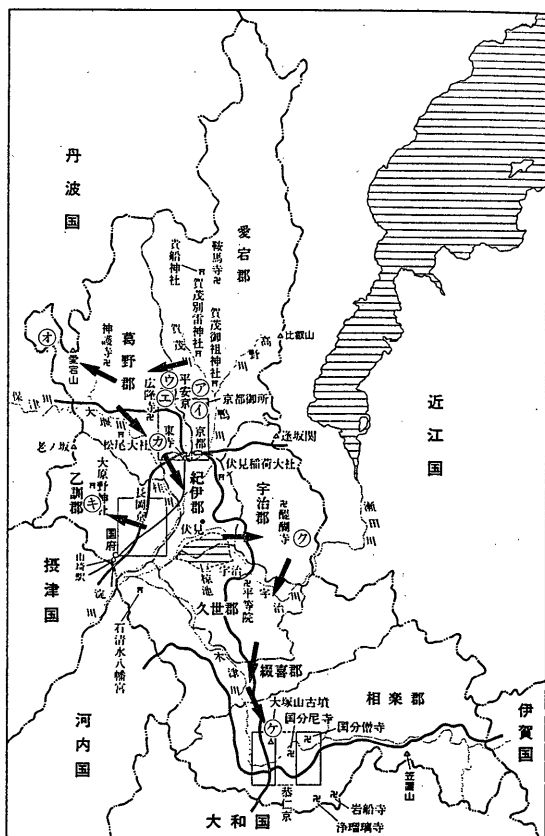
豊直(花押)

永井日向守様

幕府は、正保元年一二月に絵図元となった大名の江戸留守居を数回にわけて評定所に召集し、幕府の国絵図作成基準を伝達した。山城国の絵図元は、板倉と永井そして五味の三名が担当することになった。しかし、これら三名は一二月にはいずれも京都にいて江戸にはいなかった。五味は正保二年一月二三日に、板倉は同年三月一二日に江戸へやってきている。

板倉の役職である京都所司代は、京都の支配にとどまらず西国支配の中枢的役割を果たす重職で、重宗の在任中それを補佐したのが代官奉行の五味である。こうした二人は役職上、井上政重から直接に国絵図に関する指示を受けたと考えられ、さらに残る一人の絵図元の永井へ書状を送ったのであろう。永井には、追って幕府より国絵図作成基準である「罷上候節絵図之仕立様」が示されたようである。また、「爰許之様子兩人之御使可被申達候」とあるので、ここでも永井領は領分絵図と領分郷帳が提出されたと思われる。さらに、「兩人之御使」とは、後に触れる「郷廻奉行」の関屋市郎右衛門と梅戸八郎右衛門のことであろう。

板倉は、正保二年七月三日に絵図元の中で一人京都へ帰着した。村差出帳の内でも早く提出されたのは、愛宕郡大宮郷の同年八月二九日のもの(第2表史料ア)である。おそらくは、七月三日に板倉が帰京し、本格的な正保国絵図の現地調査が始まったと考えられる。

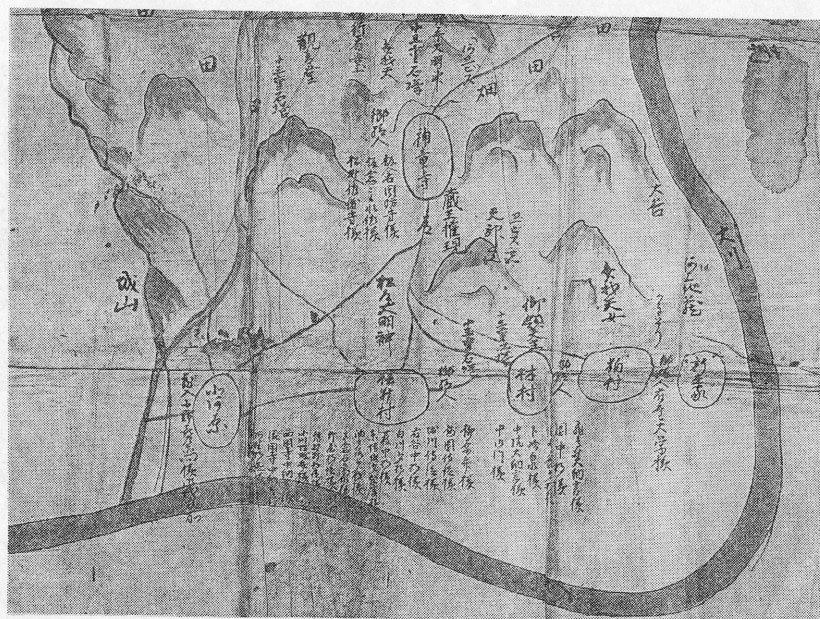


第1図 山城国における正保村差出帳の調査順序  
※ア～ケは、第2表の史料番号に対応する。

山城国の調査は、郷廻奉行が順次村を廻りながら各村の状況を検分し、村差出帳を集めた。それは、『隔賞記』にみれる郷廻奉行が大北山村に來た日と重なる日付の村差出帳である「山城国葛野郡北山郷四方境寛(以下北山郷差出帳と略)」(史料ウ)があり、またこの他の村差出帳の提出年月日が異なっているからである。従って、この村差出帳

の日付が現地調査日と考え、それを第1図にまとめた。

前述したように、最も早く確認できる村差出帳は、正保二年八月二九日付けの愛宕郡大宮郷の「家数并人数指出帳」(史料ア)である。大宮郷は、再び同年九月九日に再度の調査を受け「大宮郷高指出帳」(史料イ)を提出した。しかし、前述のように同年四月七日には、幕府の意向が五味を通じて各絵図元に伝えられ、七月三日には板倉も帰京している。大宮郷の調査が行われた八月二九日までに調査は進行していたと考えられる。かなり年代を経た文政五(一八二三)年の史料になるが(「前略」一、正保貳年、板倉周防守様御国絵図被仰付候節、賀茂支配之趣御帳面ニ



第2図 神童寺村絵図（大西大治家文書）

入候趣 山境を認、右川（賀茂川）登山手拾三石院御所様御倉入ニ認御座候。（後略）<sup>17</sup>とあり、正保二年には賀茂付近の調査が行なわれたようである。愛宕郡大宮郷指出帳の次に確認できるのは同年一〇月一日の葛野郡の前述した北山郷差出帳で、東から西へと調査は進んだらしく、愛宕郡賀茂付近から大宮郷、さらには葛野郡へと進行したと思われる。さらに調査は、後述する北山郷の調査状況を記した『隔冀記』の正保二年一〇月四日の条によると（「前略」今度郷廻之奉行、居西京之由。（後略）」とあって、「西京」に進められた。村差出帳も正保二年一〇月二日に葛野郡谷口村（史料エ）、同年一月三日に同郡原村（史料オ）、同年一二月吉日に同郡郡村（史料カ）と葛野郡を北から南へと調査は進んでいる。郡村は、葛野郡の南端にあり、洛中とその周辺の愛宕・葛野郡が正保二年度中に調査が終了したようである。

葛野郡の作成年に続く村差出帳は、正保三年三月一五日付けの乙訓郡長法寺村のもの（史料キ）であ

る。およそ葛野郡の調査が終わり三カ月を経ている。原則に従えば調査は、山城国の北から南へと進んでおり、ほぼ郡の中央にある長法寺村の調査日としては遅すぎる。従って、紀伊郡を調査し乙訓郡へ至ったと考えたほうが妥当であらう。

ついで、正保三年五月には宇治郡炭山村の調査が行なわれた（史料ク）。さらには、正保三年七月一日には相楽郡神童寺村の村差出帳（史料ケ）がみられる。久世郡と綴喜郡の村差出帳はないが、郡の位置関係から宇治郡から久世郡、綴喜郡へと進み相楽郡へ至ったとみて大過あるまい。おそらくは、神童寺村差出帳の作成年からして、正保三年中に調査は終了したのであらう。

また、神童寺村差出帳には、その付属絵図と考えられる第2図が現存している。第3図に示す北山郷差出帳に付属したと考えられる「山城国葛野郡大北山領龜絵図」以外にも村絵図が作成されたことが知られる。それぞれの村差出帳には、村絵図が付されていた可能性が高いように思われる。こうした村絵図は、国絵図作成の基礎資料となったのであらう。

ところで、北の愛宕・葛野・乙訓郡に比べ宇治・久世・綴喜・相楽の四郡は調査の日数が少ないようにも思えるが、前者三郡に比して後者の四郡は所領配置が単純で、かつ淀藩領や津藩領も広がっていた。村差出帳の調査が簡単であったことと、こうした大名領では領分絵図と郷帳が作成されたので早く進んだと考えられる。

以上のような調査の進行は、中心地（洛中）から外延部へと進んだようである。おそらくは、他国でも中心となる城下町から周辺部へと調査が及んだとみてよからう。また、調査日数は約一年半程度であったと考えられる。

広島藩では、安芸と備後の国絵図を正保二年六月に、萩藩では周防と長門の国絵図を同三年一月に大目付の内見を仰いだ。また、小浜藩では正保二年三月二六日に若狭国絵図の作製が藩主酒井忠勝から命じられ、同年八月初旬頃までに調査が終了したらしく八月二三日には一部訂正が行なわれ、九月中に完成したらしい。広島藩や萩藩の国絵図



は、内見で不合格となり、再び調査された後に提出されたようである。<sup>(18)</sup>

ここで述べた調査で完成した山城国絵図の内見での合否は不明であるが、少なくとも他国とは同じ調査日数を要している。このことは、村差出帳を受け取るだけでなく、それを検分して国絵図の下図を作成する作業が同時に進行了たことを示しているように思われる。

## (二) 『隔寔記』にみる小北山村の調査

こうして進められた調査であったが、村差出帳による調査に対する領主や村の対応状況をより詳しく知ることができる史料に、すでに利用してきた『隔寔記』がある。はじめに述べたように、田中によって検討されているが、重要な史料なので、国絵図に関連する部分を目を追いながら検討する。

①正保二年九月一六日「(前略)伊藤長兵衛呼、吉権(吉田権右衛門)同道、登山上、而当寺領内之山之画図頼也。今度自公儀、諸国指図・方境之図出来。其故、当山指図之用意也。」

『隔寔記』においてはじめて国絵図の記載がみられる箇所である。鹿苑寺の住持である鳳林承章は、絵師伊藤長兵衛を呼び、同寺の代官である吉田権右衛門を同道させ山に登って「当寺領内之山之画図」を描くように頼んだ。すでにこれ以前に公儀から国絵図作成が知らされていたので、鹿苑寺の指図を用意するためであった。

②同年九月二三日「呼伊藤長兵衛、而当山領内之画図頼書之。今度、自公儀、諸国之田畠・方境・境目之書付被乞之故、当山境目等書付之用意也、(中略)大工新蔵・若狭遣北、而当山領内之境間撰勘、打也。」

再び長兵衛が呼び出され「当山領内之画図」の作成が依頼されている。さらには、大工が遣わされて領内の境界に杭が打たれた。九月一六日に依頼されたのが「山之画図」で、今回の二三日のものは「領内之画図」であり、山だけと領内全体を描いた二枚の絵図が作成されたように思われる。

③同年九月二五日（前略）「原之壇境目之柱今日作右衛門遣、立之也。（後略）」

「原之壇」とは、鹿苑寺より北西にある現在の「原谷」を示している。ここに、境目の柱が立てられた。原之壇は、鹿苑寺が門前の百姓と係争中で、国絵図の調査に当たり境界明示をする必要があったのであろう。

④同年九月二七日（前略）而予赴原之壇、而界目之溝掘事見合、申付也。為奉行、伊右兵衛・岡市郎右衛門申付也。呼伊藤長兵衛、而当所之絵図少充書也。」

この日には、鳳林みずから原之壇に赴いて境目に溝が掘られた。また、長兵衛がよばれ、「当所（原之壇）之絵図」に書き加えが行なわれたようである。この「当所之絵図」は、おそらく長兵衛が正保二年閏五月二四日鳳林から頼まれて描いた「原之壇之絵図」のことであろう。原之壇には、鳳林の屋敷があったので国絵図の調査に際しての準備が行なわれたように思われる。

⑤同年九月二八日（中略）小北山庄屋・年寄・松原村庄屋来、今度自公儀、郷廻之書出之様子共持来、遂吟味者也。（後略）」

小北山庄屋・年寄と松原村の庄屋が、公儀から出された「郷廻之書出之様子」をもってきたので点検したようである。この規則に従って統一的な村差出帳が作成されたことがうかがわれる。後述するように相模国においても村差出帳の雛型が出されている。

⑥同年九月晦日（前略）郡廻之奉行兩人、今日北山村江来也。板倉周防守殿之者兩人、関屋市郎右衛門・梅戸八郎右衛門云兩人也。在々所々、日本国中之田畠方境・人数・家数書立指上也。小北山村・松原村・平野村亦、大北山庄之内之村也。依然、大北山之帳同紙書入也。小北山村・松原村・平野村之庄屋書物、於予手前、而請取置也。」

九月三〇日に、郡（郷）廻りの奉行人が北山村にやってきた。奉行は、京都所司代板倉周防守重宗から遣わされた関屋市郎右衛門・梅戸八郎右衛門であった。その目的は、「田畠方境・人数・家数」を書き上げのためである。小北

山村・松原村・平野村は、大北山庄（郷）に含まれる村であるので同じ各村の庄屋が作成した村差出帳に書き入れ、鳳林の前で郷廻奉行に差し出されている。郷廻奉行の二名は、村差出帳の宛名や正保郷帳の末尾にもみられ、国絵図編纂の実務担当者と考えられる。

⑦同年一〇月朔日（前略）郷廻奉行兩人、今日午刻、門前仕舞、立退也。（後略）」

郷廻奉行は、本日午刻に調査が終了して鹿苑寺門前から立ち退いたようである。郷廻奉行による国絵図の調査は、九月三〇日と一〇月一日の両日であった。絵図作成の様子はうかがえないが、おそらく二日かかって調査しているのは、作図作業も同時に進行していたからであろう。

⑧同年一〇月四日（前略）今度郷廻之奉行、居西京之由。北山寺内之封疆並名所十境名石等書付並境内之画図、吉権為使者、予遣書狀於兩奉行、遣西京也。（後略）」

郷廻奉行は、西京へ調査を進めていたようである。そこで、鹿苑寺の範圍と名所や名石などの書付と「境内画図」が吉田権右衛門を使者として郷廻奉行へ届けた。九月二九日の村差出帳の他に鹿苑寺から差し出した同寺領の差出帳と絵図があったことが確認できる。

このような村差出帳と寺領差出帳の二通が作成されたものに、大宮郷内の大徳寺領、竜安寺門前の竜安寺領がある。これらの寺領は、朱印地であったため差出帳と絵図が作成されたのであろう。具体的には、次の三章において考察することにした。

また、一〇月四日以降の経過は、『隔蓑記』に記載されていないので知ることはできない。しかし、北山郷村差出帳にみられた小北山村は、正保国絵図には描かれなかった。村差出帳には、小北山村と平野村が並記して書かれ、国絵図には平野村のみが描かれている。また、同村の石高も異なっており、村差出帳がそのまま国絵図に採用されるのではなく調整が行われたことが知られる。しかし、その他の村は、村差出帳の村名と石高がそのまま国絵図に示され



第3図 山城国葛野郡大北山領麓絵図（北村和彦家文書）

ている。差出帳の内容が国絵図に反映したとみてよい。

ところで、この時伊藤長兵衛が描いた絵図はどのようなものであったのであろうか。大北山村の庄屋を代々務めた北村家文書に正保二年一〇月作成の「山城国葛野郡大北山領麓絵図」（第3図）がある。また、鹿苑寺文書にも文字の書込みはないが類似する絵図が所蔵されている。両者は写しであり、基図は同じものであるものと思われる。この基図が伊藤長兵衛が描いたものと考えられなくもない。しかし、北村家所蔵の第3図の絵図にみられる「大北山村領支配境」の記載は、村差出帳の文言とほぼ同じである。また、絵図と郷帳の差出人は、大北山村の鹿苑寺領と金地院領の庄屋・年寄となっている。これらのことからみて、この村差出帳に付属して出された絵図であった可能性が高いように思われる。

前述したように長兵衛は、九月一六日にみられる寺領内の「山之画図」や同月二三日の「当山領内之画図」を描いている。長兵衛の描いた絵図はいずれ

も鹿苑寺内の絵図である。タイトルからして、一〇月四日に鳳林が権右衛門を使者として郷廻りの奉行へ届けさせた「境内画図」の方が長兵衛が描いたものである可能性が高いように思われる。

以上のように、山城国においては京都所司代配下の郷廻奉行二名が順次村を検分し、村差出帳を受け取る一方で国絵図の作図作業を進めていったようである。また、村差出帳は規則に従いながら作成され、同時に付属する絵図も提出されたことが明らかになったように思われる。

### 三、村差出帳の種類と調査項目

第3表は、各村差出帳にみられる調査項目を比較したものである。これによって、村差出帳の種類と調査項目及びその地域的特色を考察できる。なお、本表の番号は、第2表の現存村差出帳の一覧、第1図の山城国における調査順序、さらには以下の文中で示した史料番号とに共通しているので、合わせて参照して欲しい。

#### (一) 相模国

当国の村差出帳は、三種のものに分類することができ、それぞれに調査項目が異なっている。それは、項目毎に段階的に調査が進行したように考えられる。

まずは、史料①「村差出明細書」の雛型と、それに則して作成された史料②羽島村の「村差出明細書」帳をみてみよう。

の調査項目一覧

山 城 国									丹波	陸奥
大 宮 郷		北山郷	竜安寺領	原村	郡村	長法寺村	炭山村	神童寺村	江嶋里村	田島町
史料ア	史料イ	史料ウ	史料エ	史料オ	史料カ	史料キ	史料ク	史料ケ	史料A	史料a
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○	○		○	○	○	○	○	○	○
	○	○		○	○	○	○	○	○	
	○	○		○	○	○	○	○	○	○
	○	○		○	○	○	○	○		
	○	○		○	○	○	○			
	○	○		○	○	○		○		
	○	○		○	○	○	○	○		
					○	○	○	○		
							○	○		○
							○	○		○
○		○	○				○	○	○	
○		○	○				○	○	○	
			○	○	○		○	○		
							○	○		
○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
○		○	○	○	○	○	○	○		
			○			○	○	○		
○				○	○	○	○	○		○
							○	○		
										○
										○
										○

第3表 村差出帳

	模 相 国								
	羽 島 村		与 瀬 村		下川尻村	手広村	入山瀬村	土 屋 惣領分	窪田領
	史料①	史料②	史料③	史料④	史料⑤	史料⑥	史料⑦	史料⑧	史料⑨
①村名	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②村高		○	○	○	○	○	○	○	○
③領主名	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④領主別石高						○	○	○	○
⑤永荒の有無など	○	○	○		○				
⑥水損・旱損所				○	○				
⑦地目別石高	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑧地目別面積						○			
⑨物成						○			
⑩運上									
⑪斗代									
⑫夫役									
⑬はへ山・柴山(植生)	○	○	○	○	○				
⑭山の広さ	○	○	○						
⑮村の広さ									
⑯村の入口									
⑰家数(身分別)	○	○	○						
⑱人口(身分別)	○	○	○						
⑲僧侶人数	○	○							
⑳馬数	○	○	○						
㉑寺社	○	○	○						
㉒名所・旧跡									
㉓出入作									
㉔村役人									
㉕その他村の諸施設									

史料①（村差出明細書雛型）

御代官成瀬五左衛門当年何年

手代 神谷三右衛門

藤沢領内何村

一、田方何百石

本田

一、畠方高合

同

一、当作残仕付申候

一、家数何百軒

内何軒本百姓  
何軒水のミ

一、人数何百軒

内何人男  
何人女

せん宗

一、宗源院何人弟子沙弥共ニ

山伏

一、何々坊人数何人

一、馬数何拾疋

一、御林何木但百間ニ何間御座候

一、御竹やふ何竹御座候

一、百姓支配之何木山御座候

右之外御林も屋ふも無御座候、已上、

正保貳年閏五月



名主 何右衛門判

史料② (羽島村差出帳)

御代官成瀬五左衛門当年拾壹年

一、田方九拾三石壹斗七升貳合

本田

一、畠方四拾三石四斗 四升八合

同

高合百三拾六石六斗二升

一、当作不殘仕付申候

一、家数三拾五軒 内本百姓 廿四軒  
水のミ 十一軒

一、人数貳百五人 内百拾九人男  
八拾六人女

せん宗

一、徳昌院 壹人

一、馬数貳拾壹疋

一、御林しは山但七拾間三拾間御座候

右之外御林も屋ふも無御座候 已上

正保貳年とり閏五月

手代 二宮長右衛門

羽島村

名主 文三郎印

百姓 孫右衛門印

与五兵衛印

史料①、②ともに所蔵者が同じであり、雛型とまったく同じ形式の村差出帳となっている。最初に出てくる成瀬五左衛門は、名を重治といい、代官であって正保相模国絵図の絵図元の一人である。成瀬は、村差出帳の雛型を提示し、それにしたがって村差出帳が村々から提出されていることがわかる。調査項目は、一二項目に及んでおり相模国で最も詳しい調査項目の村差出帳である。しかし、雛型には損所や物成の項目が欠けており、こうした項目は別の調査がなされたようである。

それは、羽島村と同様の内容を持つ史料③与瀬村の正保二年五月の村差出帳があり、さらに与瀬村には史料④の同年一〇月に行なわれた損所の調査項目の村差出帳があるからである。なお、この史料④と同じ内容を持つものに史料⑤の正保二年九月二八日の「下川尻村明細差出」が知られる。

また、同二年一〇月の史料⑥「手広村田畑差出」には、村高をはじめ領主名とその石高、等級品別面積とその石高、さらにその物成率が記されている。従って、史料①の雛型に従った、②や③の村差出帳の後に④、⑤で損所、さらに⑥で物成が調査され、それ毎の差出帳が提出されていることがわかる。

史料④（与瀬村差出帳）

御林松木有之

相模国奥三保津久井領内与瀬村

百姓雜木有之

野村彦太夫御代官所

一、高貳百八拾五石八斗五合

高辻

拾貳石壹斗七升七斗

田方日損所

内

貳百七拾三石六斗三升五合

畑方日損所

外

一、高拾四石五斗九升五合

新畑

(以下略)

史料⑥ 相州鎌倉郡深沢之庄手広村差出之事

一惣高三百七十四石八斗

内三百四十九石八斗ハ

大岡美濃守知行

内廿五石ハ

青蓮寺知行

一上田三町七反九畝廿三步

十四

分米五十三石壹斗六升七合三勺四才

一中田拾壹町八畝貳十九歩

十三

分米百四拾四石壹斗六升五合六勺八才

一下田八町九反壹畝拾六歩

九ツ

分米八拾石貳斗三升八合

田合貳拾三町八反八歩

分米合貳百七拾七石五斗七升一合二才

(以下畑略)

右田畑合三拾九町壹反貳畝拾八歩

分米三百七拾九町壹反貳畝拾八歩<sub>勺</sub>

松山有 柴山有

(以下略)

以上のように、相模国では三種類の村差出帳がみられ段階的に調査が進んだことが知られる。また、こうした村からの差出帳は、領主によって一纏にされ、最終的な村高が決定したようである。史料⑦の「入山瀬村村柄書上」は同村の村高と領主別石高をまとめたもの、史料⑧の「土屋惣領分村柄書上」は中郡土屋惣領分だけの郷帳で、史料⑨の「中郡内窪田領書上」は中郡の旗本窪田氏の高をまとめたものである。

## (二) 山城 国

山城国でも、三種類の村差出帳がみられる。

次の史料アは大官郷の「家数・人数」と「草山」を、史料イは「石高」を書き出したものである。両者は綴じ紐で一括された文書で、対をなすものである。史料アは、正保二年八月二八日に調査され、史料イは同年九月九日に調査されている。なお、史料アでは本阿弥光悦の拝領地である光悦町の部分のみを掲げた。

史料ア 大宮郷家数並人数指出帳

(前略)

光悦屋敷町之分

一東西貳百参拾貳間

但中にて八百五拾六間  
下にて八百八拾間

一南北参百四拾間

但右之内三ヶ一ハ畠、残而三ヶ一ハ山林竹木

一寺 三箇寺

家数七拾屯間(軒)

男女数貳百拾九人

(後略)

史料イ 大宮郷高指出帳

(表紙略)

山城国愛宕郡 大宮郷

惣高合千三百拾貳石三斗二升四合七勺七才

此物成六ッ三分 但旱損所

一内高千貳百三拾五石壹斗七合七勺七才者 土居之内ニ有

七百六十三石三斗六升八合五勺者田也

四百参拾五石三斗五升九合四勺者田也

一七拾七石三斗七合者 土居ノ外分、但田方也、畠方ハ無之、

御本所御高ノ覚

一高千六百拾五石九斗貳升九合七夕七才

大徳寺

一高七十石三斗九升五合ハ

柳原大納言様

(以下領主別石高略)

こうした二つの村差出帳に分かれているのは、村内に寺院とそのまとまった朱印地がある場合に限られている。先の『隔寔記』にみられる北山郷の調査においても、北山郷差出帳とは別に鹿苑寺領の差出帳が作成されたようである。アと同じ内容のものにウの「竜安寺領差出帳」があげられるが、おそらく同村にも大宮郷の資料イと対応する差出帳があつたのかもしれない。

このような二つに分けられた史料に対して、次の史料ク「炭山村明細書写」は、大宮郷の史料アとイを一纏にした最も基準的な村差出帳の内容となっている。

史料ク 炭山村明細書

山城の国宇治郡

(炭) 炭山村

一、高百八拾七石三斗四升貳合

内

百七拾七石四斗壹升八合ハ 上醍醐知行

壹石九斗貳升四合ハ 三宝院知行

八石は

上醍醐乗円知行

高合百八拾七石三斗四升貳合

内

拾貳石五斗貳升三合ハ 田畠共ニ永荒

残テ百七拾四石八斗壹升九合ハ 毛付

但し、田畠共ニ六、七年も日損仕り候

一、酉ノ年の納米百拾壹石八斗八升四合壹勺

但し、高ニ付き六つ四分ニ廿年以前より定る也

毛付高廻し五つ九分七りんか

一、斗代

上田壹反ニ付 壹石四斗代

中田壹反ニ付 壹石貳斗代

下田壹反ニ付 壹石代

上畠壹反ニ付 壹石三斗代

中畠壹反ニ付 壹石壹斗代

下畠壹反ニ付 九斗代

屋敷壹反ニ付 壹石三斗代

一、夫役は

伽藍へ御用次第ニ役仕り候

一、当村の山はへハ柴山草山ニテ御座候

長さ東西指渡し候拾三町五反程

長さ南北五町

入口

辰ニ一口ハ池尾村へ通道

但し山道

巳ニ一口ハ二ノ尾村へ通道

但し大道

西ニ一口ハ木幡村へ通道

但し大道

戌ニ一口ハ日野村へ通道

但し山道

北ニ一口ハ上醍醐へ通道

但し山道

一、家数三拾九軒

内式拾六軒

役義仕り候

残拾三軒ハ隠居・後家・神主・肝煎 役儀仕らず候

一、宮

うさ八幡、屋ねは檜皮葺鳥居有り、末社四社有り

おこないし三福寺 坊主耆人

一、末社ノ修理領の山ニヶ所御座候

天神ハ東向きニ御座候

観音堂南向きニ御座候、浄土坊主一人

一、寺式ヶ寺

浄土坊主二人

一、人数貳百拾五人



男百十七人

内 女九拾四人

坊主四人

一、旧跡ハ 岩ふち

一、領境の事

卯方ハ二尾さかへ、岩間辻かきり

辰方ハ池尾境、かすへ坂かきり

南方ハ三室境、岩ノふちにわたり川限り

北ハすこか堂馬場かきり

西ハ木幡境、ほうか尾かきり

戌ノ方ハ日野村境、さしかたわかきり

右、当村の分残らず書き付け、指上ケ申し候、以上

(以下署名、年月日略)

この他に、本史料と同じ内容を持つ、史料オの原村、カの郡村、キの長法寺村、ケの神童寺村の各村差出帳がみられる。

### (三) 丹波国・陸奥国

丹波国の村差出帳は、次の一点だけである。

正保国絵図の調査と「村差出帳」

史料 A 丹波桑田郡江嶋里村高家数覚

一 高百六拾八石七斗六升

内四拾貳石七斗六升 御蔵納五味備前守御代官領分

百貳拾六石 御請人津田平左衛門

一家数三拾四軒

右之内

拾貳軒 役家

貳軒 寺

八軒 隠居

五軒 後家

七軒 下人

山内之覚

一 東西長拾六町 谷峯みて

一 南北横七町 谷峯みて

右之わけ

一 横五町ニ長六町 内山小林

一 横六町ニ長十六町 柴山江嶋里村中村入組

(後略)

本史料の調査項目は、相模国で検討した史料①の村差出帳の雛型にみられる調査項目の内、「地目別石高」「馬数」「人口」「寺社」などを欠いている。相模国と同様に、他の調査項目については別の村差出帳が作成された可能性が高いように思われる。

陸奥国の村差出帳は、南山御蔵入領にあった田島町のものである。文政二年の写本を大正二年に写し、それをさらに昭和十一年に写したもので、内容に後世の加筆と思われる点がある。また、これまでの村のものとして町を対象としているので単純な比較はできない。長文なので、ここでは史料そのものは掲げないが、各項目に説明があり、特に各寺社の由来が詳しい。調査項目には、他国にない出入り作の状況や村役人の構成、村の諸施設（堰、橋、郷蔵）などがみられ、今後同じ調査項目を持つ差出帳の発見が待たれる。

以上、国別に各村差出帳の種類と調査項目をみてきた。調査項目に該当する事象がその村にない場合、必然的に調査項目とその結果が村差出帳には記されなかった。また、相模や山城のように段階的に調査が行なわれているものもある。そこで、各差出帳の調査項目を総合的に検討しなくてはならない。各国の全調査項目を整理すると、相模国が一六項目、山城国が二〇項目、丹波国が七項目、陸奥国が九項目である。丹波と陸奥は、各一点しか発見できていないので、別の村差出帳があればもっと調査項目が増えることとなる。

村差出帳の全ての種類があると考えられる山城国と相模国に共通する項目は、村名をはじめ村高、領主名、領主別石高、永荒、損所、地目別石高、物成、はへ山柴山、家数、人口、僧侶数、寺社の一三項目を数える。山城のみにみられるものは運上、斗代、夫役、村の広さ、村の入り口、名所・旧跡であり、相模だけのものは地目別面積、馬数である。山城の方が、村の様子を詳しく調査していることがわかる。

いずれにしても、正保国絵図の編纂事業によって作成された村差出帳は極めて詳細な村の明細が記されている。特に山城国のものは、後世のものとも見劣りがしない。木村が指摘したように村明細帳の原型であるといえる。

## おわりにかえて——村差出帳の成立過程——

すでに紙数もつきたので、最後にこうした村差出帳がどのように成立したかについて検討を加え、小論のおわりにかえたい。

まず前提となるのは、正保国絵図編纂事業が寛永年間の三代將軍家光による江戸幕府の政權完成期の最後の事業として行なわれたと考えられることである。寛永期に幕府は、農村に対して支配の強化を進め、さまざまに調査を行っていることに注目したい。

第一に、寛永一〇（一六三三）年に五人組制度が本格化した。ついで同一七年には、宗門改役が設置された。宗門改役には、正保国絵図事業の総責任者となった大目付井上政重が任命され、同一九年には政重を国絵図編纂事業で補佐した宮城和甫が任にあった。また、同一〇年には田畑永代売買禁止令なども出されている。

さらに、これらの農村統制と期を逸にして、宗門人別改帳や人別改帳・村明細帳などの近世村における基本帳面が登場している。正保国絵図に伴った村差出帳には、木村が指摘するように明細帳の原型とも言うべき調査項目があるが、次の「家数併人数之帳」や「家数人馬書上帳」の総計部分との共通性も見逃せないところであろう。

山城国では、寛永一六年から翌一七年にかけて「家数併人数之帳」がつくられている。『隔婁記』の寛永一六年六月二五日の記事によると、板倉配下の奉行が村々を廻って、村から差し出す「家数併人数之帳」を集めている。

寛永一七年二月に作成された近衛家領五ヶ庄の「五ヶ庄百性（姓）改帳<sup>29</sup>」などは、こうした板倉による「家数併人数改」によって作成されたものであろう。これには、家ごとにその家族構成（各人の性別と年齢）が書かれ、最後にその総計が掲げられている。

また、寛永一八年に全国を大飢饉が襲った。幕府は、翌一九年に畿内近国の幕領を対象に家数と人数の調査に關す

る命令を出して、伊丹康勝と曾根吉次を奉行とした。伊丹と曾根の両名は、幕府の勘定頭であり、正保国絵図編纂事の期間も同職にあった。正保国絵図は、幕府官庫である紅葉山文庫と勘定所に各一枚が献上されており、こうした人口調査も国絵図作成に関して勘案された可能性が高い。

この人口調査の具体的なものは、同二〇年十二月及び二十一年七月～九月の「家数人馬書上帳」<sup>②</sup>として確認できる。同年一二月に正保に改元するから、正保国絵図編纂直前の調査であった。

「家数人馬書上帳」の調査項目をみると各家族毎に、石高・家の大きさと家屋構成・家族構成・牛馬数が書かれている。また、これらのうち総計には、村の総石高、人口、牛馬数、と水損・干損の石高が記されているのである。先の寛永一七年に作成された「家数併人数之帳」の項目に牛馬数と水損・干損が増えたことになる。

このような幕府領における農村調査をへて正保国絵図の編纂事業が開始された。ここで示されたのが、幕府の国絵図基準である「国絵図可仕立覚」にみられる郷帳に関する部分である（便宜上、①～⑧条とする）。

（前略）

- ① 一、郷村知行高別紙ニ帳ニ作二通上ケ候事。
- ② 一、絵図帳共ニ郡わけの事。
- ③ 一、絵図帳共ニ郡切ニ郷村々高上ケ可申候事。
- ④ 一、帳之末ニ一国之高上ケ可申候事。
- ⑤ 一、絵図帳共ニ郡々名並郷々名惣而難字には朱ニ而仮名を付候事。
- ⑥ 一、絵図帳共ニ村ニ付候はへ山並芝山有之所ハ書付候事。
- ⑦ 一、郷村不落様に念を入れ、絵図並帳ニ書付候事。
- ⑧ 一、水損干損之郷村帳ニ書付候事。

## (後略)

このうち⑥・⑧の二つの条項は、山城・相模ともに差出帳の調査項目として掲げられているものである。また、諸国の郷帳にも両項目は記載されている。この調査項目が、郷帳に関連して設定されたことがわかる。また、郷帳にみられる記載様式の特徴が差出帳の調査項目と一致するものとして、地目別石高や領主名・村高などがあげられる。

要するに正保国絵図の村差出帳は、幕府直轄領で行われた「家数人馬牛書上」のうち家族単位のデータである人別改の部分省略しその総計部分(村の総石高、人口、牛馬数、水損・干損所)を基礎とし、幕府が示した郷帳の作成基準にみられる「はへ山」と「芝山」の有無と、国絵図作成に必要な領主名とその石高、村境、名所・旧跡などを加えて登場したものと考えてよさそうである。また、寛永期に行なわれた幕府直轄領における農村調査の総まとめとして村差出帳が作成され、これらのデータが国絵図として地図化され、郷帳としてまとめられたもののように思われる。小論では、わが国において最も古い村明細帳が、木村の指摘のように正保二(一六四五)年から三年にかけて作成された村差出帳であることがより明確になった。村明細帳は、近世文書のなかでポピュラーなものに属する史料の一つである。その村明細帳の原型は、わが国ではじめて統一的な作成基準が示され、本格的な国土の基本図として官庫に収納することを目的として行われた正保国絵図の編纂事業における調査で作成されたものと考えてよさそうである。また、その調査は、きわめて詳細な内容であったことが確認できた。

正保国絵図は、その後の国絵図の基準となったといわれている。それを示すように、元禄国絵図やその村差出帳は、正保国絵図とその村差出帳の提出以降における変化や誤謬を訂正するだけに終わっている。<sup>22</sup>それは、正保国絵図や郷帳にみられる近世村の記載内容が一定の基準として機能したことを意味しているのであろう。また、正保村差出帳の調査対象地となった非領国、特に幕府領における近世村の全体像が幕府によって把握されたことを意味しているように思われる。<sup>23</sup>

註

- (1) 川村博忠『国絵図』吉川弘文館、一九九〇年、七三頁。
- (2) 磯永和尚「宇治市歴史資料館本正保山城国絵図の記載内容」(『歴史地理学』一六九号、一九九四年)。
- (3) 木村礎「寛永期の地方文書」(北島正元編『幕藩体制成立過程の研究—寛永期を中心に—』吉川弘文館所収)。
- (4) 平塚市編『平塚市史二 資料編近世(一)』平塚市、一九八二年、七〇六頁。
- (5) 丸島隆雄「近世前期相模と中原代官」(平塚市博物館研究報告『自然と文化』一〇号、一九八七年)六八頁。
- (6) 田中敏雄「絵師伊藤長兵衛の二つの画業」(『日本美術工芸』六五八号、一九九三年)。なお、『隔裏記』の鹿苑寺の調査は、赤松秀俊編『隔裏記』(金閣寺一九五八年)の第一巻、七三八〜七四三頁が該当する。
- (7) 前掲(1)七九〜八〇頁。
- (8) 前掲(1)八五〜八六頁。
- (9) 細川護貞監修『綿考輯録第七巻』出水神社、一九九一年、二九〇頁「正月十五日御國中絵図之儀ニ付御書態以飛脚申候」。
- (10) 小浜市史編集委員会編『小浜市史藩政史料編一』小浜市、一九八三年、三四三〜三四四頁の「三五九酒井忠勝書下」と、「正保二年若狭敦賀之絵図」の調査による。
- (11) 東京大学史料編纂所編『大日本古文書東大寺東南院文書之三』東京大学、一九八五年復刻版、四五五頁。
- (12) 四日市市編『四日市市史第六巻史料編絵図(解説)』四日市市、一九九二年、一一〜一二頁。
- (13) 小野寺淳「絵図に描かれた自然環境—出羽国絵図の植生表現を例に—」(『歴史地理学』一七二号、一九九五年)。
- (14) 杉本史子「国絵図作成事業と近世国家」(『歴史学研究』一九八八年別冊)五四頁。
- (15) 以下、絵図元の居所と行動は、藤井讓治編『近世前期政治的主要人物の居所と行動』(『京都大学人文科学研究所調査報告三七』、京都大学人文科学研究所、一九九四年)、の板倉重宗、五味豊直、永井直清の項目によった。
- (16) 長岡京市史編さん委員会編『長岡京市史料編二』長岡京市、一九九二年、六九〇〜六九一頁永井家文書、「代官奉行五味豊直書状」。
- (17) 京都市編『史料京都の歴史第6巻北区』平凡社、一九九三年、一七〇頁。
- (18) 広島藩と萩藩の事情については前掲(1)九〇〜九六頁に詳しい。なお、小浜藩については、前掲(10)に関係文書が収録されている。
- (19) 京都市歴史資料館の鹿苑寺文書のマイクロフィルムによった。
- (20) 陽明文庫所蔵。本史料は、宇治市歴史資料館のマイクロフィルムによった。
- (21) 寛永二年「(河内国若江郡若江村人数家数万改帳)」(高尾一彦「江戸初期の農村構成とその発展」(『研究』一

六、一九五八年）、「河州古市郡之内碓村人数改帳」（宮川満『太閤検地論第Ⅲ部』御茶水書房一九六三年）、「河州丹北郡之内更池村家人数万改帳」（『更池村文書』九号）、「和泉国大島郡上神谷之内家人数馬数牛数樹木山方名寄帳」（小谷家文書、国立資料館所蔵）など。

(22) 元禄国絵図の村差出帳の一例（山城国宇治郡太鳳寺村、智積院文書）を掲げると、次のようになっている。

智積院寺領所太鳳寺村之覚

一、新絵図分割等、其外古絵図之通可被仕候、古来与川筋違候所、或新川・新道村又者新池沼等有之者、被相改絵・新図ニ可候記事

右御書付之内、谷川筋宇治川端ニ而四畝拾歩川筋違御座候其外正保二年酉年已来相変り候儀無御座候御事

（以下略）

一、以下の三行の問いに対して、後の三行で川筋の変化の他は、正保二年以来変りがないとしている。

(23) これまでの正保国絵図の評価が、国絵図の交通記載の詳細さや城絵図の徴収などの点から、軍事的な面が強調されてきたことを無視しているのでない。島原の乱をはじめ、鎖国によるオランダとの関係悪化、中国における明の滅亡と清国の誕生などの国内外における軍事的緊張関係が、当然国絵図作成に影響を与えたと考えられる。

付記 本論は、一九九四年一月に宇治市歴史資料館で行なわれた第一回国絵図研究会で発表した内容に加筆修正したものである。研究会で、貴重なご助言を賜った花園大学の福島雅蔵先生、山口大学の川村博忠先生、熊本学園大学の上原秀明先生、名古屋市立博物館の種田祐司先生に感謝致します。